広島工業大学紀要研究編
第45巻（2011）pp.291-296
論　　文

建築家・谷口吉郎の言辞にみる「材料」についての基礎的考察

柴田　ちひろ*・河内　浩志**

（平成22年10月29日受付）

Basic consideration of the“Material”in descriptions of architect Yoshiro TANIGUCHI

Chihiro SHIBATA and Hiroshi KOUCHI

(Received Oct. 29, 2010)

Abstract

A lot of architects have interpreted building materials variously until now. The purpose of this paper is to pay attention to a Japanese modern architect, Yoshiro TANIGUCHI who gave various accounts of “materials”. We also study the meanings of “materials” in his writings and clarify how he interpreted the term, “materials”. The study concludes by suggesting we find his five critical viewpoints about “materials”.

Key Words: Yoshiro TANIGUCHI, materials, architect, technique

1.1　はじめに

現在，建築を構成する「材料」は，建築技術の発達とともに進化してきた。建築材料の進化に伴い，人工環境の整った快適で均質的な空間は，地域・風土に左右されることがなく作られ，また，建築を構成する上で重要な材料や構造も大きく変化し，多種多様な建築が，いたる場所に存在している。しかし，実際には技術の発達に頼り，形態のみが先行した建築や，風土や地域性とは切り離された建築が，いたる場所に存在し，それらの建築により，醜悪な風景が作り出されている。

このような時代の中で，建築家は，建築を構成する要素の一つである「材料」を，どのような事柄として把握しているのであろうか。

本研究では，建築の「材料」に対して多くの発言や記述を残している，日本近代建築家の一人である建築家・谷口吉郎に注目する。建築を構成する「材料」とは，どのように選定されているのか。また，建築家にとっての「材料」とは，どのような事柄として捉えられているのか。ここでは，谷口吉郎が発言する「材料」という言葉に着目し，その言葉の意味の一端を明らかにする。

1.2　建築家・谷口吉郎と既存研究・主題・目的

建築家・谷口吉郎は，1904年に石川県金沢市に生まれ，1975年に75歳で亡くなり，戦前・戦中・戦後の激変する三つの時代を生きた。谷口が設計した代表作の一つに「藤村記念堂」がある。谷口は，「藤村記念堂」を建設するにあたり，すべて地元産の材料を用い，さらに地元の村人の手仕事により「藤村記念堂」を完成させた。谷口は，建築を建物として捉えるのではなく，人や風土により，視覚的な事柄を越えた事柄を建築の中に作り出そうと試みた。また，谷口の作品は，建築作品だけにとどまらず，記念碑も手掛け，建築家としてだけではなく，芸術家でもあった，日本近代建築を代表する建築家の一人である。彼は，多くの評論や記事を残しているにもかかわらず，既存研究は少ない。その中でも，作品に関する研究は多くあるものの，本研究である「材料」という言辞に着目した研究は見当たらない。

本研究の主題は，建築家・谷口吉郎にみる「材料」についての基礎的考察である。本研究の目的は，谷口吉郎が記述する「材料」の言葉の意味を明らかにすることである。

* 広島工業大学工学系研究科環境学専攻
** 広島工業大学環境学部環境デザイン学科

表１．関連語が抽出された著作名と年代とその数

材料	年代	著作名	箇所
建築家志願	1930年（昭和5年）	ル・コルビュジエ検討	1
	1931年（昭和6年）	新しき住居形式へ	4
		建築	2
	1935年（昭和10年）	新しい建築美の意義	12
	1936年（昭和11年）	機械建築の内省	6
		化膿した建築意匠	5
	1938年（昭和13年）	建築意匠学・序説	22
	1941年（昭和16年）	国土美	3
清らかな意匠	1948年（昭和23年）	環境の意匠	1
		ミカンの皮の意匠	30
		狂える意匠	1
		聖なる意匠	1
		旗の意匠	1
		建築の意匠	19
日本美の発見	1956年（昭和31年）	みんなの住まい	2
	1960年（昭和35年）	日本建築の曲線的意匠	16
		日本住宅の合理性と詩情	9
	1973年（昭和48年）	日本の住の心	4

表２．抽出された「材料」の関連事項

「材料」に関連する語	箇所		
材料	54	標準化された材料	1
建築材料	23	構造材料	1
材料・構造	8	郷土特産の材料	1
材料学	8	材料構造学者	1
新材料	6	構造・材料	1
材料適応性	5	施工材料	1
屋根材料	4	経済的な材料	1
新しい材料	2	壁材料	1
特産材料	2	保温材料	1
天然材料	2	こだわらない材料	1
軽い材料	2	材料強度	1
材料自身	2	大陸的な材料	1
材料構成	1	丈夫な材料	1
使用材料	1	良好な材料	1
仕上げ材料	1		
合計	139		

1.3　研究の進め方

本研究の進め方は，文献収集・整理を行う。具体的な進め方は，第一に，「材料」の言辞をキーワードとし，そのキーワードを対象資料から抽出する。そして第二に，その前後の文脈を調査・分析し，それらを整理して構造化することを行った。さらに，それらを比較・検討することで「材料」とその事柄の関係性を明らかにする。これらのことから，谷口吉郎にとっての「材料」の言葉の意味の一端を明らかにすることが試みられる。

2.1　対象資料の選定

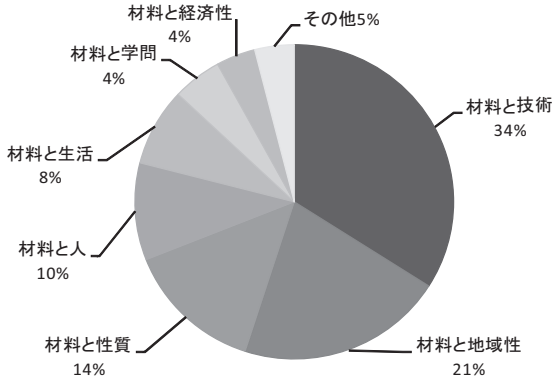
本研究は，谷口吉郎の著作を収めた『谷口吉郎著作集』を対象資料とする。特に，建築に対する意見が述べられた『谷口吉郎著作集第二巻・建築評論』を，中心的な一次資料とした。対象とされる資料は，大きく『建築家志願』，『清らかな意匠』，『日本美の発見』の三つの文章で構成されている。

2.2　「材料」への注目

これらの資料では，谷口吉郎の発言する「材料」という言辞に注目する。谷口は，著書の中で「材料」に関心を払

表３．「材料」の関連語とその分類と比率グラフ

「材料」に関連する語	合計箇所	主題	比率
材料学	6	材料と技術	34%
材料	14		
新しい材料	1		
材料	5		
材料・構造	6		
壁体の材料	1		
材料学	1		
材料構造	1		
材料構造主義	1		
建築材料	6		
屋根材料	1		
保温材料	2		
屋根材料	1		
材料強度	1		
建築材料	7	材料と地域性	21%
材料	13		
郷土特産の材料	2		
特産材料	2		
天然材料	2		
屋根材料	1		
材料構造	1		
大陸的材料	1		
新建築材料	1	材料と性質	14%
材料	8		
軽い材料	2		
壁材料	1		
こだわらない材料	1		
新材料	1		
材料自身	1		
材料的	1		
屋根材料	2		
丈夫な材料	1		
材料構造学者	1	材料と人	10%
材料・構造	1		
材料	9		
材料構造主義者	1		
建築材料	1		
材料自身	1		
仕上げ材料	1	材料と生活	8%
建築材料	4		
材料	3		
材料適応性	3		
材料構成	1	材料と経済性	4%
標準化された材料	1		
建築材料	3		
材料構成	1		
材料・構造	1	材料と学問	4%
材料	3		
材料学	2		
新材料	5	その他	5%
新しい材料	1		
材料	1		



グラフ１．「材料」から分類された主題とその割合

い,「材料」の言葉を多用することは明確である。しかしながら,「材料」の言葉を自明の如く使用しており,従って,「材料」の意味自体を定義しようとしているわけではない。その意味で，ここでは，谷口の使用する「材料」の言葉の定義は未定である。それでは，建築家･谷口吉郎にとって,「材料」とはどのような意味なのであろうか。

一般的な意味における建築の「材料」という言葉の意味は,『建築講座８』[1]によると「*建築材料とは，建築物に使われている材料および建築するときに使う足場などの材料の総称*」や『大学過程建築材料』[2]では,「*建築材料は，柱･はりなどの骨格を構成するものから，仕上げ装飾さては設備まで用途に応じその種類はきわめて多い。*」と定義されており,「材料」とは，建築を構成する物的な要素の一つであり，さらに加えて，構造，形状，物理的，装飾と言ったように，分類されて捉えられている。このように，幅広い意味で捉えられている「材料」は，谷口にとって，どの様な事柄として捉えられているのであろうか。以下では，建築家・谷口吉郎に即して考察を進めて行く。

表１は,『谷口吉郎著作集』の中に書かれた「材料」に関係する単語とその箇所,及び著作集名と年代である。『谷口吉郎著作集・建築評論』では，139 箇所の「材料」に関わる単語を確認することができた。時代に着目してみると，谷口は,「材料」という言辞を，多種多様な意味で述べていることがわかる。

次に，**表２**は,『谷口吉郎著作集第二巻・建築家志願』の記述の中で,「材料」の前後の関連事項を抽出したものである。さらに，**表２**から抽出された関連事項を検討・解釈していくと，**グラフ１・表３**のように，分類された。その結果，谷口吉郎は「材料」をその他を除いて「材料と技術」,「材料と風土」,「材料と性質」,「材料と人」,「材料と生活」,「材料と経済性」,「材料と学問」の７つとして捉えられていた。しかし，**表３**の「材料」に関連する語を注意深く見ていくと，重複されている関連語がある。このことより，谷口にとっての「材料」の主題は，一つ一つが独立して存在しているのではなく，それぞれが関連していることが読み取れる。

3.1 「材料」と「技術」について

グラフ１より,谷口が使用した「材料」全体の 34％が「材料と技術」に関する事柄であった。谷口は『化膿した建築意匠』[3](1936 年）において，建築の外観だけを模倣し，無理やり当てはめた建築を「*偽りの建築*」と述べている。さらに，谷口は,

「*建築の外観は建築の機能と**構造材料**から必然的に生れ，建築工事の技術に正当な依拠を求めてこそ，素直な潑溂とした意匠が出来上がるのである。*」

上述から,「*偽りの建築*」に対し,「*素直な潑剌とした意匠*」が逆説的な事柄として語られている。構造材料は機能と同時に建築の外観を決定し，建築工事の技術に建築の正当性を求めていると述べている。ここでの「材料」とは，機能と構造が即表現されることと，これらを組み立てる施工工事の技術の意味を含んでいる。

『新しい建築美の意義』[4](1935 年）では,

「*力学的な計算によって設計された**材料**学的な純粋さは,如何なる緻密な技巧によって粉飾された虚飾よりも，健やかな美しさを示す。そこには〈必要〉に迫られた抜きさしのできぬ切迫感が，力強い意力にまでに高揚した美しささえ感ずる。*」

ここでは,「材料」を材料自身が持つ力学的な特性として捉えている。谷口は，先ほどの「*偽りの建築*」と同様の意味としてここでは,「*虚飾*」と言い換えている。材料の力学的な根拠とは無関係に「装飾」された建築は,「*偽りの建築*」としている。

以上のことから，ここでの「材料」は，材料，即構造，即表現として捉えられている。つまり,「材料」は，機能や力学的な構造と直接関係し，それを直ちに建築の表現として表明している。換言すると，谷口は,「材料」を巡る建築の技術が，率直に建築意匠に表現されることとして捉えている。

3.2 「材料」と「地域性」について

次ぎに，谷口が使用した「材料」全体の 21％を占めていた「材料と地域性」に注目する。

『日本建築の曲線的意匠・序説』[5]1960 年）で，谷口は,

「*石材の乏しい所や，柱や梁に使えるような細長い大石を産しない地方では，**建築材料**はレンガか小石しかないために，そんなところではレンガや石の〈壁〉が発達する。*」

石材の性質は，産出される場所性が大きく関わることが述べられており，建築の構法と構造を決定したことが指摘されている。

そして,『建築の意匠』[6](1948 年）では,

「*日本建築のスタイルは，この国土の**特産材料**である木材による木工技術に，著しい影響を受けているといわれている。ギリシアの建築様式もその起源は木造構造といわれる程に，その様式はこの**材料**の特性に基因している。*」

「材料」に関して,産出地域のギリシアと日本が比較され,具体的な材料は，木材や石，レンガを挙げている。これら物質的な「材料」は，地域性と密接に関係しており，地域の産物である「材料」が建築の構造と構法を決定する根底的な要因であると捉えている。そして，様式を確立する職

人の技術の意味も含まれている。言い換えれば，地域性が建築を左右すると言える。

また，『新しい建築美の意義』[4)]（1935 年）において，

「*日本のごとく世界稀に見る雨量の多く，かつ夏季の酷暑を持つ土地では，雨と太陽の射入を防ぐため，是非とも建築には廂を必要とし，そのために軒の出の深い屋根は日本建築の特色とさえなっているほどであるが，その廂が，真に建築構造と**建築材料**の性質に適合した形式のものであらねばならない。*」

木造建築の廂の成立において，その日本独特である廂は，高温多雨の気候から決定されている。日本の気候から必要とされた構造や材料が即表現され，「廂」という形態として表れていることが分かる。

さらに，軒の出の深さは，日本建築の特徴であり，その屋根構造や廂の片持ち構造の表現が，屋根や廂の材料と一体的に捉えられ，建築の内外の中間領域の表現に繋がっているのではなかろうか。

本項での「材料」の意味を整理すると，「材料」とは，まず，材料が産出される地域・場所・気候に，大きく依存することとして捉えられている。そして，いわゆる建築様式は，その「材料」の特性から，構法や構造が決定され，それを施工する職人の技術が大きく関わっていた。

3.3 「材料」と「性質」

『日本建築の曲線的意匠・序説』[5)]（1960 年）では，雨傘の形状を例に挙げ，

「*雨傘は竹と紙で作られ，その竹の骨は，傘が開いた時は緊張して直線となっている。（～略）すなわち凹曲面とならず凸曲面となっている。これが構造的にも正当な形で，（～略）コーモリ傘の骨組は鉄製で細く，一層柔軟な**材料**であるから，凸曲線は一層強くなっている。それが，**材料的**な表現である。*」と述べている。

表現としての材料は，日本の雨傘と西洋のコーモリ傘の形態について述べられている。雨をしのぐという同じ機能に対して竹や鉄の異なる「材料」を用いることで表現が異なっている。

「材料」の材質の差異による表現は，同じ機能でも竹と鉄の材料の選択の差異により，凸面の曲線の表現において，鉄の柔軟性と細さ，繊細さを，より強調する表現の可能性が指摘された。

3.4 「材料」と「人」

次に，『日本住宅の合理性と詩情』[7)]（1960 年）では，日本の装飾について語られている。

「*同時に**材料**や構造が，そのままで品格の高い美しさを発揮する意匠は，それを加工し，それを組み立てる工人たち，即ち大工，左官，指物師などの〈手仕事〉の熟練による。その手の技術は驚くべきほど巧みで，**材料自身**の性質色彩を活かし，構造的均衡を洗練した比例として表現する。*」と語っている。

このことから，建築を作り出す工人たちの「*手仕事*」とは，材料そのものが持つ構造的な性質や秩序を理解し，材料の持つ力を引き出す技術のことである。そして，さらに重要な事は，材料や構造が，装飾抜きで，そのままの表情で，それらの組み合わせの均衡を，洗練させることで，品格の高い美しさを表現するという，その組み立ての熟練された技術を指摘していることである。

従って，ここでの「材料」とは，これまで述べてきた「材料」や「構造」，「機能」を組み立てる職人の「*手仕事*」が加わることで，材料の性質がより引き立てられ生かされ，表現される事柄としている。

3.5 「材料」と「生活」

谷口は，『ル・コルビュジエ検討』[8)]（1930 年）で，コルビュジエとアダム・ペリアンの合作である住宅に対し，

「*高級フランス製化粧水の容器*」と批判している。

「*その室内に交錯するガラス，アルミニウム板，（～略）の表面感触に構成された空間は，一体如何なる生活様相を容器とするに相応しいものであるかと反問せずにいられない。*」

ここでは，ル・コルビュジエの住宅が，「*高級フランス製化粧水の容器*」に例えられている。材料であるガラスやアルミニウムが強調され，人間の生活の中身（化粧水：生活様相）を矮小化し，逆に外装の容器（化粧水の容器：建築の形態）を，過度に重視して住宅が表現されていることへの違和感が，批判的に述べられている。

続く住宅内部への発言の

「***建築材料**が発揮している効用は，単に〈お蚕ぐるみ〉式な肌触りだけではないか。*」

との補足は，感覚的なレベルにおいて，肌触りとしての触覚への拘りのみを強調していることに対する批判を表明しているとも解釈できる。

このことから，谷口は，ル・コルビュジエの住宅に対し，生活と材料にずれが生じていると語っている。そして，「材料」は，触感や形態である視覚的に対象化できる単に即物的な事柄として捉えていないことが分かる。

さらに，『新しい建築美の意義』[4)]（1935 年）で

「*直接，視覚に訴える外壁の**仕上げ材料**さえ，風化に耐久力を持ち，内部の熱伝達を防ぐ防熱性を持つなどの考慮から選ばれたのである。*」

ここで述べられている「*内部*」は，人間生活の機能に関わり，特に，耐久性や防熱性の機能のこととして捉えられ

ている。

さらに，外壁の表現における材料は，

「*外観はそれに付随すべきもの，或いは，建築の機能がそのまま外観に表現されるべき*」と述べられている。

建築の外観が，その内部の機能を決定するのではなく，内部の機能が，材料の選択を通して，外観として表現されるべきと指摘している。つまり，材料は，外観を視覚的に外から決定するのではなくて，内部の生活機能の選択的表現として，人間生活から内部環境の性能としての材料的外観を決定することを意味していると解釈できる。

『建築の意匠』[3)]（1948 年）において，谷口は，

「***材料**や構造によって組み立てられる建築は，決して無内容のものではない。建築は人間生活を内容とする。即ち常に建築は実用目的を満たす。その意味に於て，理学的なものから工学的なものとなる。*」と述べている。

ここでは，まず材料や構造は，理学的な事柄と，工学的な事柄として捉えられている。理学的な事柄とは，物理的特性だけをみた材料や構造のことであり，工学的な事柄とは，これら理学的なものに人間の生活，実用性が加わった材料や構造のことと指摘されている。つまり，材料や構造は，人間生活の内容を工学的実用性の目的として存在する。

従って，この項全体の文脈から谷口にとっての「材料」は，外から視覚的に対象化される事柄ではなく，人間の生活に関わる実用目的や生活における居住性能を，人間に関わる内側の事柄として，材料それ自身が持つ性質を通して，構造材料として表現されることが明示されている。

3.6 「材料」と「経済性」

『日本の住の心』[9)]で，谷口は，白壁の土蔵の消失について語っている。

「*徳川末期から明治・大正にかけて，白壁の土蔵は名古屋ばかりでなく，大阪や東京，そのほかの都会では，町にこんな白壁の倉が並んでいて，美しい町並みを作っていた。しかし，今では農村に行かなければ，白壁の倉はみられない。*」

上述から，かつて美しい街並みを形成した白壁の土蔵は，豊かさの象徴であった。経済的大都市と言われる大阪，東京，名古屋でも見ることができたが，今では，田舎でしか見ることができないと，土蔵の消失について述べている。土蔵は本来，物や財産を格納する機能を持っている。しかし，土蔵の機能は，貨幣経済への時代変化や生活価値観の変化から，経済的な財産に対する意識や土蔵に対する意識が変化したことで，都会から消滅したのであろう。谷口は，そのことで，美しい街並みが，都会から消失したことを暗示している。さらに，

「*これは生活の豊かさを表現するものが，白壁から新建材に移ったためと思われる。すでに漆喰という**材料**がなくなり，それを塗る職人もいない。*」

このことから，経済的な豊かさの象徴である漆喰の材料による土蔵の白壁の表現が，新建材の多用によってより安価な白壁風の表現に移行していることが指摘された。さらに重要な指摘は，漆喰材料の衰退が，その衰退に呼応するように，その左官技術の職人までも喪失の危機に遭遇するに至っていることである。

谷口は『新しい建築美の意義』[4)]の中で，

「*力学的な計算によって設計された**材料学的**な純粋さは，如何なる緻密な技巧によって粉飾された虚飾よりも，健やかな美しさを示す。そこには〈必要〉に迫られた抜きさしのできぬ切迫感が，力強い意力にまで高揚した美さえ感ずる。この意味において，現代建築が過去の建築家によって意匠を凝らした宮殿や，寺院建築よりも工場建築に新時代的美を感じるのである。それは生産という機能を第一要件とする目的に向かって，一切の不経済を払い除けた建築の裸出が築かれているのだ。*」

ここでは，材料の経済的な表現の意味が指摘されている。意匠を凝らした宮殿建築の装飾過多は，健やかな美とは考えられず，むしろ，不経済の表現として退けられている。新時代の必要の表現は，生産の機能を目的にした工場建築に代表される如く，経済性の象徴として，裸出の表現としての材料力学的な純粋な表現が強調されている。

さらに，

「*従って，今まで非芸術の一典型とされた工場生産による多量生産品も，今では輝かしい新意義の美を持つ工作品となり，**標準化された材料**を組み合わす長屋建築式の一律的な建築も，新しい美を持つものとしてきた。（～略）**建築材料**は工場生産である改良品を揃えることができ，現場で作り上げるような不出来品は少なく，天候に左右される心配も少なく，至って，経済的な完成を果たすことができる。*」

ここでは，現場生産の材料と，工場生産の材料が比較されている。上述から，工場での無技巧な外観を持つ建築は，非芸術とされてきたが，生産と言う点においての意味を持つことから新しい意義と述べている。前者は，天候に左右されて不出来な材料が多く生産され不経済である。後者は，逆に，工場で大量生産され，一律的で標準化され改良が加えられるが，そのこと自体が，経済性に裏打ちされた，新たな生産的美意識を生んでいる。

以上のことから，ここでの「材料」は，経済的な表現として捉えられている。建築の外観は，建築の内容である生産という機能が，材料力学的に純粋に表現されることと明示されている。さらに，工場で大量生産されることは，経済性という新しい意義を内包している。

3.7 「材料」と「学問」

『建築意匠学・序説』[10]の『1. 建築工学』において，谷口は，「建築工学」とは，専ら建築の建設に関する工学的なものと考える立場であると説明している。したがって，建築家は，物質的構築を対象とし，科学的知識の形而下の範囲において，設計や施工に関与する技術家となると述べている。

「*それ故に，**材料学**及び構造学の研究発達はただ単にそれだけに局限された問題ではない。さらに発展して，時代に出現すべき建築様式の樹立という意匠問題にも関連する問題となる。同時に**材料構造**の構築問題は建築においては決して無内容なものではない。常に建築の実用目的を充足する意味において，理学的な**材料・構造問題**から工学的な構築問題となる。その上に決して独存し得るものでない。*」

学問的な意味における材料や構造は，建築様式の樹立に関わる意匠問題に連関する。それは，時代に出現すべき意匠に関わりながら，実用性を目的にした内容を重視した構築的な問題を表現することになる。

「*建築工学とはかかる意味において，即ち単なる工学としてではなく，目的と実用とを考慮し，経済に関係し，もってその成果と，それにより生ずる影響をも意識せるものでなければならぬ。このことは**材料・構造**のみに限らず，建築の物質的構築に関するすべての学問に当て嵌まる。だから，建築工学は建築物として出来上がる作用と，その影響にも緊密な関係を結ぶものでなければならぬ。更に進んで，その成果に指針を与え，従って建築意匠の進路に必然の軌道を敷設するものとならねばならぬ。*」

材料や構造による物質的構築に関わる学問は，人間生活における目的とその実用性や経済性が重要である。さらに，材料や構造によって作られる物的な建築物の及ぼす作用や影響は，人間生活に緊密な関係を構築するものと解釈されている。さらに重要な指摘は，材料や構造に関わる学問が，時代に即した建築意匠を与えるものと解釈されていることである。

そして，

「*しかし，〈建築工学〉それ自身はかかる意匠に触れず，むしろ自身は工学としての自己を完成するために，純粋性を保ち，研究を続けるも，その過程および成果は常に広い意義において，建築文化に連繋されていることを忘れてはならぬ。*」

しかし，材料に関わる学問は，上述の意匠の問題に関わらなくても，その工学的成果は幅広く，人間の実用的生活に関わる意味において，人間生活の構築に関わる建築文化に全体に連絡していることも指摘されている。

以上のことから，ここでの「材料」は，学問的な意味において，建築様式の樹立の意匠に関係し，実用性という内容を重視する構築的な問題として捉えられている。そして，その構築的な学問は，常に学問として留まるのではなく，人間生活にまで密接に関係し合っていることが明示されている。

3.8 資料から明らかになったこと

本稿では，谷口吉郎が記述する「材料」を具体的に，記述の中で，文脈としてどのように捉えているのかを考察してきた。谷口が記述する「材料」は以下の５つのように捉えられていた。

①「材料」は，その他を除く「技術，地域性，性質，人，生活，経済性，学問」の７つとして捉えられていた。そして，これらを重層的に関連して捉えられている。

②「材料」は，人間生活である機能や構造が率直に建築意匠として表現される事柄として捉えられている。

③「材料」は，産出される地域・風土・気候に大きく依存しており，建築様式樹立に密接に関係している。

④「材料」は，現代の生産過程や外観的表現として経済性の意味を含んでいる。

⑤「材料」は，意匠に関わりながら，人間生活の実用目的や経済性を満たす構築的な学問として捉えられている。

４．おわりに

本研究により，谷口吉郎が記述する「材料」の意味の一端が明らかになった。今後の展望として，谷口が記述する「材料」の捉え方の構造化を図り，建築家・谷口吉郎の建築の「材料」の確信に迫っていきたい。

文　献

１）飯塚五郎蔵・建築講座８材料・Ｐ１・彰国社（1998）
２）狩野春一・大学過程建築材料・Ｐ１・オーム社（昭和49）
３）谷口吉郎・谷口吉郎著作集第二巻　建築評論・淡交社（昭和56）・P108
４）同書・P85・87・89
５）同書・P382
６）同書・P322・323
７）同書・P430
８）同書・P54
９）同書・P474
10）同書・P134
11）栗田勇・現代日本建築家全集６　谷口吉郎・三一書房・（1970）
12）下出源七・建築大辞典・彰国社・（昭和49）